

〔酒井抱一展によせて〕

酒井抱一の初期作品「夢・蝶図」に見る抱一絵画の特質

江戸時代後期に江戸で活躍した酒井抱一は、江戸時代中期の京都の絵師・尾形光琳に私淑したことでは知られる。光琳の画風を学びながらも、光琳作品に倣うだけにとどまらず、抱一の時代の流行や江戸の好みを積極的に取り入れ、江戸の都市文化が成熟した時代を背景に瀟洒で洗練された画風を完成させます。江戸文化の先端に接し、多様な江戸の関心に応え、幅広い画業を営んだ抱一が、若き日に学び遊んだ場が、抱一の生家・酒井雅楽頭家と、江戸の遊里・吉原でした。有力譜代大名家という恵まれた境遇に生まれた抱一は、大名家の子息としての教養を積みつつ、江戸の社交場であり、様々な文人たちが集った吉原で遊興し、酒井家と吉原の文事に関わりながら、その美意識を磨きました。

「夢・蝶図」(姫路神社蔵、図1、以下本作と記述)は、抱一の兄・忠以と抱一のコラボレーションであり、酒井家における二人の交流と文事を伝えてくれる作品です。忠以の書く「夢」の字と抱一の描く「蝶」の絵で、「莊子」「齊物論」の「胡蝶の夢」を表しています。明和九年(=安永元年・一七七二)に酒井雅楽頭家を継ぎ、二代目姫路藩主となった兄の忠以は、「宗雅」の藩で知られ、松江藩主松平不昧に茶の湯を学び、俳諧や絵画などにも優れた風雅の人であり、父母を早くに亡くした抱一の良き理解者・庇護者でした。本作は後述するように、抱一が二十代の天明年間(一七八一～八九)後半頃に描かれた初期作品ですが、すでに抱一作品の特色の萌芽を見ることができます。

その特色の一つが、古画を基にしながら改変を加え、情趣を増す

工夫がされている点です。莊周(莊子)が夢の中で胡蝶となり、ヒラヒラと飛び自分が莊周であることを知らなかったが、目が覚めてみると自分は莊周であり、莊周の夢で胡蝶になったのか、胡蝶の夢で莊周となったのか分からないという有名な故事「胡蝶の夢」を、夢の字と蝶の絵を組み合わせて描く本作の構想の基となったのが、様々な画賛を取めた松花堂昭乗筆「寄合書巻物」です。現在は分断され散逸していますが、長山孔寅筆の模写が残されており、八幡市立松花堂美術館に所蔵されています。模写を見ると、画賛の一つに、松花堂が蝶を描き、玉室宗珀が「夢」字を書いた、胡蝶の夢があります(図2)。松花堂昭乗は、江戸時代初期の僧侶であり、石清水八幡宮滝本坊の住職を務め、書や絵画、茶の湯に優れたことで有名です。忠以は滝本坊の什物が散逸の危機に陥った際、二十四点の作品を自ら買い集め、収集した作品を滝本坊に寄付しました。「寄合書巻物」はその二十四点のうちの一点にあたります。忠以が滝本坊の作品を収集しはじめたのが天明五年(一七八五)頃からといい、滝本坊に寄付したのが天明八年(一七八八)十二月であることから、本作品はその頃の制作と考えられます。

模写ではありませんが、松花堂と玉室による胡蝶の夢(図2)と本作(図1)を比べると、「夢」字の書き方に大きな違いがあることが分かります。玉室は「夢」字をまっすぐに記しているのに対し、忠以は斜めに傾けて「夢」字を記しています。この改変により、「夢」字が横たわるように表され、「夢」字が眠る莊周をイメージさせやすいものとなっています。

中央の「一」部分も、人の肩と手のように見え、字に莊子の姿を投影するという趣きをより味わうことができます。

この改変は、「夢」字を書いた忠以の主導によるものでしょうが、こうした酒井家における文事や、季節行事に様々な趣向ある飾りなどが工夫された吉原の文事において、抱一絵画における趣向性が育まれたと考えられます。抱一の作品を見ると、「夢・蝶図」のように、古画や当時流行の作品などを基にしつつ、そこに改変を加え、しっとりとした風情や洒落た面白みを増す趣向が凝らされているものが多くあります。例えば、光琳作品を基にして描いた抱一筆「楨に秋草図屏風」(細見美術館蔵、図3)と、抱一編『光琳百図後編』(文政九年刊)に掲載される光琳作品(図4)を比べると、光琳作品では楨の左に伸びる枝が下まで垂れ葉は多く、秋草も密に茂るのに対し、抱一作品では、楨の枝は長く垂れず、美しいアーチを描き、葉は少なめで、秋草も種類や量が少なくなり、すっきりとした構図となっています。また、光琳作品は、「光琳百図後編」の記述によると「金地極彩色」で描かれていましたが、抱一作品では桔梗の群青、萩の葉の緑青など鮮やかな彩色を用いつつも、楨の葉や菊の葉、白い菊の花などには金地が透けるような透明感ある彩色が用いられています。こうしたすっきりとした構図や透明感ある彩色の効果で、抱一作品は、秋の清涼な空気を感ぜさせます。ただ面白い改変をするというのではなく、情趣を感じさせる画面へと仕立てあげるのが、抱一絵画の特色の一つであり、大きな魅力です。

「夢・蝶図」に見られるもう一つ

の特色が、小さな虫への眼差しです。抱一の描く蝶の羽は淡墨の広がりや簡略に描かれていますが、脚や触角は細線で細やかに捉えられています(図5)。特に触覚は、先端がわずかに膨らみをもって描かれており、蝶の特色をよくとらえていることが分かります。「十二月花鳥図屏風」(香雪美術館蔵、図6[三月図部分])のように、抱一の草花・花鳥図の優品には、円山派の描法などを取り入れた写実的な虫が描き込まれ、情景を身近に感じさせる点が光琳作品との相違の一つに挙げられます。「夢・蝶図」の蝶は、後の抱一作品ほどの写実性はありませんが、小さな虫にそっと目を寄せる抱一の繊細な感性がすでに窺えます。(宮崎もも)

※図2は『酒井宗雅の茶と交遊』茶道資料館、2012年、図4は『抱一派花鳥画譜』第2巻、紫紅社、1978年より複写しました。

図5

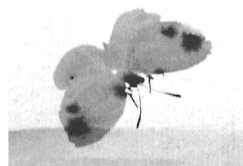


図6

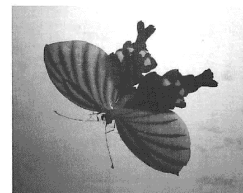


図3



図4



図1



図2



季刊 美のたより No.188

平成26年10月31日

発行 大和文華館